



*WE ARE NOT
IN THIS TOGETHER*

三十四回の冬

ウィリアム・キトリッジ
小川高義訳

*WE ARE NOT
IN THIS TOGETHER*

三 十 四 回 の 冬

ウィリアム・キトリッジ

小川高義訳

We Are Not In This Together
by William Kittredge
Copyright ©1984 by William Kittredge
Foreword Copyright ©1984 by Raymond Carver
Japanese translation rights arranged with
Graywolf Press, Inc. through Tuttle-Mori Agency, Inc.
Japanese edition ©1992 by Chuokoron-sha, Inc.

三十四回の冬

1992年6月10日初版印刷

1992年6月20日初版発行

著者 ウィリアム・キトリッジ

訳者 小川 高義

発行者 嶋中 鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替 東京2-34

印刷所 三晃印刷

製本所 矢嶋製本

©1992
Printed in Japan
ISBN4-12-002123-8

目次

序文 レイモンド・カーヴァー 3

水鳥の木

11

三十四回の冬

33

飛行

53

石鱚の熊

65

青い石

111

もののはずみが、いつも武器

127

地下の川

147

一緒に来たのではない

163

訳者あとがき

204

序 文

「なんにでも重力がかかって動くんだ。重けりゃ落ちるし、軽いのは飛んでく」という言い方をしたのは、ウィリアム・キトリッジが初めて出した短編集の表題作、「ヴァン・ゴッホの畑」の中で、脱穀機について解説する小麦農家の主だった。「重けりゃ落ちるし、軽いのは飛んでく」もう少しこの作品を読みすすむと、こうも描いてある。「やればやったなりに意味は出るぞ。やりようが良くてもまずくても、あとに残るもんがあるんだぜ」その通りである。一級品の小説家を書く「現実らしい」場面でも、本当に起こる「現実の」場面でも、そういうものだ。「やったなりに意味は出る」ように注意してほしい。『三十四回の冬』(“We Are Not In This Together”)に収まっているのは、この国にあって一種独特な地域を取りあげ、みごとに描ききった作品ばかりなのだ。いままでに西部を語り伝えた作家は、あまり多くはない。思いつくのは、ウォレス・ステグナーあたりか。それに、H・L・デイヴィスやウォルター・ヴァン・ティルバーグ・クラーク。もっと新しいところで、マックス・ショット、ジョン・キーブル、ジム・ウェルチ、トム・

マグウェイン。こうやって最近の名前を挙げていくなら、ウィリアム・キトリッジを落とすわけにいかない。

なるほど西部といっても広いが、ここで描かれるのは、いわゆるウェスト・コーストの西部ではない。たとえばサンフランシスコ、ポートランド、シアトルなどの都市は、キトリッジが描く人々の暮らしと無縁ではすまないものの、やはり、ヨーロッパ大陸の都市だったとしてもおかしくないくらい、離れた位置にある。ここに出てくる西部は、北カリフォルニアの真ん中へんにあるレッド・ブラフから、東オレゴンを経て、アイダホ、モンタナ、ワイオミングにかけてである。小さい町や谷、モーター、さびれた農家を題材に、作者はアメリカン・ドリームから何光年も離れた人物たちを見せてくれる。ぶつつぶれた高望みを、古びて廃物になったコンバインと同じように、置きっぱなししてきた人たちだ。

そういう山がちな地方の天候を、キトリッジは知り抜いている。気圧計はぐんぐん下がる。傷つくおそれがある。死ぬおそれもある。ほんとうに死ぬ人がいる。アルコール中毒かもしれないし、狩猟に行った先で氷を踏み抜いて溺れるかもしれないし、ハイウェイに停めた車の中で酔って寝ていて火事になるのかもしれない。あるいは、「石鱈の熊」の中のように、わけのわからない「いかれた」若者に殺されるかもしれない。この長い話は、すばらしい名人級の出来だろう。魔物が憑いたような緊迫感と、ある場所を鮮やかに描き出す手際において、わたしにはウィリアム・ギヤスの『ピーダセン家の子ども』を思わせる。どうなるのか、じっくり読んでもらいたい。

こんな若い男に家へ来られて、銃をつきつけられたら、どんなだろう。五人も立て続けに殺してきたやつである。

「足が冷えるよね。そこで帽子をかぶる。それが決まりなんだ。頭は冷蔵庫みたいなもので、そのスイッチを切らないと、手足の指が暖まらない。だから帽子をかぶる」……そう言うのと立ち上がり、廊下へ出た。着てきた羊皮コートのポケットに毛糸帽が突っ込んである。これを濡れた髪の上からかぶった。「さて、もう痛さを感じない。頭を隠したから。こうやって頭のスイッチを切ってから、やることがあるわけさ、いろいろと」

物語に出てくる地名を、いくつか挙げてみよう。ヴァカヴィル、ナイアル、アーリントン、ホーン・クリーク、ブラック・フラット、フレンチグレン、メアリーズ・リヴァー、コーヴァリス、ブラインヴィル、マンティーカー、ダヴァネロ、ペーカーズフィールド、シャフター、セーラム、ヤキマ、バイユート・クリーク、クラマス・フォールズ、トレーシー、ワラワラ、ドーナンの、レッド・ブラフ、マクダーミット、ディーニオ、ウォーカー・レーク、ビタールート、コディ、エルク・リヴァー、クラーク・フォーク、ロンボック、コロラド・スプリングス。

人名としては、クライマン・ティール、ロバート・オーンター、ジュールズ・ラッセル、アンブローズ・ヴェガ、デーヴィー・ホース「石のように硬い柏楨の木の門柱に叩きつけられ、右足

が潰れたので、そんな名になった。ある日曜日、酔った勢いで女にいいところをみせたいばかりに、若い荒馬を乗りこなそうとしたのがいけなかった、ベン・オールトン、コリー・オールトン、ステファニー・ラッド、ジェローム・ベッダリー、オラリー・ヨーク、レッド・ヤント、ロニー、クリーヴ、ビッグ・ジミーと「お仲間」のクラレンス・デューンズ、ヴァーゼルとマック・バンタ、保安官シャーリー・ホランド、その妻ドリス、「大馬鹿野郎の」ビリー・クーマー、マリー・プレスター、「ビューートの町から来たアニー」という娼婦を置いていたエイモス・フランツ、ドーラとスリッパ・カウント。

こうした地名人名には詩的な響きがある。しかし、キトリッジの物語に出る人物たちの暮らしには、ほとんど詩などない。もともと少しくらいはあったのかもしれないが、なにかの邪魔がはいった——詩なるものは、むりやり押し出されてなくなった。あるいは、自分が長いこと飲みすぎたせいで失ったのかもしれない。なくしたとなれば、かえって惨めだ。もうどうしようもないと知りながら、まだしも良かった日々を思い出させられながら、生きている格好だけはつける。こうなったら、なにがなんでも、たとえ兄弟が埋葬されてもバーの喧嘩で殺されても、牛にその日の餌をやりに行かないといけない。餌をやらなければ、こっちが餌にありつけない。やらなければだめだ。これは義務だ。で、その死んだ男が、自分の妻の腹にいる子の父親だとわかったりもする。慣れるまでは大変だ、気持ちの整理が必要だ。という話が「三十四回の冬」にある。この本の中でも傑作と言える。

音楽を聞く場面があるとすれば、その音楽は、ウェイロン・ジェニングズだったりロジャー・ミラーだったり、ロレッタ・リンだったり、またトム・T・ホールが「スボーケン・モートル・ブルース」を唄ったり、あるいはマール・ハガードや、リンダ・ロンシュタットと「パーティ・ドール」、教会の音楽では、「千歳の岩なるキリスト」、「主よ、御許に近づかん」。字を読むとしたら、『スポーティング・ニュース』、シアトル、スポケーン、サンフランシスコなど都会の新聞も読むが、たいていの場合、住んでいるところまでは一日遅れで届く。だから、暗い運勢は予言ではなく確認として届く。

この短編集には、ある種のとんでもない家庭状況についてカミユが言ったような病んだ不愉快が、あちこちにありあまるほどある。「石鱚の熊」に出てくる中年の保安官、シャーリー・ホランドに耳を傾けてみよう。結婚して二十年目の、子供のいない男だ。

こういう我が家に入るとき、どう入るものだろうか。中で面倒が起こっていて、もう住む家とも思えなくなっていて、大きくなってからの食事と睡眠をほぼ全うした所なのに、住んだという感覚を呼び起こせなくなっている家。その感覚につながることを二つ三つでも思いたい。食事の支度をしたことを一回分でも思い出したい。……時には自分の家へ踏み込まないといけない。……わが家へ踏み込み、ひとわたり眺める朝が来る。旅先でものを見るように。

「おれが子供のころ」と、若者は言った。「あんた、おれの親父を知ってたろう。マック・バンタといって、ビタールートの谷のほうにいた」

「バンタなんてやつは知らんぞ」ホランドが言った。

「ともかく、そっちにいたんだ。春になると雁が北へ飛んでく朝があったりした。おれはよく芝地に出た。日が昇ってって、白く塗ったフェンスがお袋のバラの花を囲んで、そういう朝を親父はブルーバード・モーニングと言った。……おれの妹がいたんだ。親父とお袋も。ライラックの茂みに鳥が遊ぶ。結局つらい世の中だ、なんて言い方を親父はしたが、ブルーバード・モーニングなら何もつらくないから、親父は笑ってられた」

ウィリアム・キトリッジは西部を描く。じかに知っている世界と、その住人を、哀しみと畏れと愛をこめて描く。類のない忘れがたい仕事だと、わたしは思っている。

レイモンド・カーヴァー

三十四回の冬

水鳥の木

The Waterfowl Tree

溪谷へ入る二時間近く手前で、雪に出くわした。黄昏の吹雪が狭いアスファルト道へ横なぐりに叩きつける。ステーション・ワゴンが宵闇が迫る中を鈍い速度で進んだ。

「手間を食うぞ」彼の父が言った。「エヴァが気を揉んでるだろう」

上背がある十七歳の少年は、手を首の後ろに組み、ガラスに氷の膜が張った座席窓から、薄ぼんやりした光の具合を眺めていた。こうして女の名が出てくると、いよいよ何か始まる感じになる。

「きれいな人？」

「おれにはな。てことは、きれいと思っていいんだ」

男は笑った。視線は道路から離さなかった。がっしりした体軀の、五十代半ばを過ぎた男やめである。「この年になれば、きれいも何もない。おとなしければいい。——なんて言うだけになると、もう年だな」

ややあって、また男が言った。「子供のころの猟を覚えてるが、今とは違った。もっと鳥が

いたのもそうだし、一発ごとに何かしら仕留めないとはいられなかった」

「どういうこと？」少年が尋ねた。

「獲物を当てにしたからさ。わざわざ弾を買って、獲ってくるんだ。だからディ・シュパンダウが死んでった。ずーっと水の中へ胸まで浸かってって、落とした鳥を取ろうとした。足がつつて溺れたよ。岸からボートを出した。揚がったのは午後だ」

雪が小止みになった。男は車を速く行かせながら、運転に集中した。

「やっぱり、こんなだった。——雪が降って、氷の厚みが一フィートあって、一日中零度を越えなかった」

少年は思いがけなく聞いた遠い昔の話を、父親がずっと続けてくれたらいいと願った。だが子供の頃の遥かなる霞んだ溪谷から長らく隔たって暮らした男は、ただハンドルにかぶさり道路だけを睨みつけていた。

「今とは違うんだろうね」少年は父の話を途切らすまいとした。

「そりゃあ、だいぶ違う」男が応じた。「暮らしが全然違った」

このあとは二人とも黙っていた。吹雪を脱したのは、すっかり暗くなった頃だった。最後の雪片が散る中を走り抜けると、今度は満月の光を浴びた。冷気が深閑として張りつめていた。そのため、あたりの新雪は結晶して、ヘッドライトに燦くことがあった。

「朝までには、かちかちに凍るぞ」男が言った。「また鳥が飛んでくる」